

岩手県における復興教育・防災教育の取組 ～震災から5年、これから方向性～

岩手大学大学院教育学研究科[教職大学院]
岩手大学地域防災研究センター
森本 晋也

1

1 はじめに ～H28岩手県教育委員会経営計画より～

「いわての復興教育」の推進

復興教育プログラムに基づく教育活動の推進
復興教育副読本の活用
学校・家庭・地域が連携した実践的な防災教育の推進

幼児児童生徒のこころのサポートの推進

教員研修(こころの授業)
スクールカウンセラー・巡回型カウンセラーの派遣、専門家の派遣、こころと体の健康観察

児童生徒の安全で安心な教育環境の確保

仮設住宅から通う児童生徒数(県教委調べ)

	H28	H27	H26
小 学 校	533人	776人	1,134人
中 学 校	358人	497人	692人
県 立 学 校	421人	614人	736人
合 計	1,312人	1,887人	2,562人

仮設校舎、間借りの学校(県教委調べ)

小・中学校 12校

内陸避難の子、継続ケアを 「要サポート」過去最多！

県教委は23日、東日本大震災後の児童生徒のストレス状況を把握する調査「心とからだの健康観察」の2015年度の結果を公表した。教育相談が必要な「要サポート」の子どもの割合は全体的に減少傾向だが、被災後に内陸で暮らす中学生のうち「要サポート」は16・6%で過去最多。11年度に未就学だった児童も割合が高い。専門家は沿岸のケアの継続に加え、被災した子が少なく学校全体での取り組みが難しい内陸での対策の必要性を指摘する。……

…県教委は内陸への転校で被災体験が周囲と共有できない孤立感に、勉強や部活など思春期特有のストレスが加わったと分析する。県教委学校教育室の大林裕明生徒指導課長は「震災から5年を経て、やっと怖さや悲しさを話せるようになった子どももいる。他部局との連携も含め、**長期的に専門的な対策**を考える」としている。(岩手日報 2016/03/24 記事より)

2 震災後の岩手県の取組

平成24年度



初版を
基盤と
しながら

絶えず理念
等を確認

平成25年度

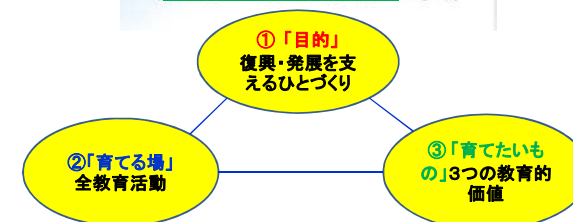
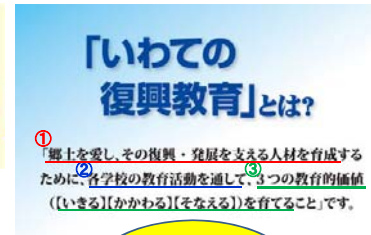


- 「学校防災・災害対応指針」
- 「県教育委員会危機管理マニュアル」【改訂版】(H24年3月策定)

津波警報発表中、又は、2次災害のおそれのある場合、児童生徒の保護者への引渡しは行わない。



「いわての復興教育」プログラム【改訂版】



「いわての復興教育」プログラム 改訂版07

「いわての復興教育」の推進 5つのポイント

②【教育的価値】 震災津波の体験からクローズアップされた教育的価値を明らかにしました。

震災津波の経験を後世へ語り継ぎ、自らが在り方を考え、未来志向の社会をつくることが必要
震災津波の体験からクローズアップされた教育的価値を3つに分類し、テーマを付ける。

- 1 生命や心について【いきる】
- 2 人や地域について【かかわる】
- 3 防災や安全について【そなえる】

「いわての復興教育」の教育的価値

「いわての復興教育」プログラム 改訂版08

「いわての復興教育」の推進 5つのポイント

③【教育的価値一覧表】 3つの教育的価値と具体の21項目からなる教育的価値一覧表を作成しました。

「いわての復興教育」における3つの教育的価値と具体の21項目

教育的価値一覧表	
3つの教育的価値	具体の21項目
1 生命や心について【いきる】 震災津波の経験を踏まえた生命の大切さ・心のあり方・心身の健康	①～⑦
2 人や地域について【かかわる】 震災津波の経験を踏まえた人の絆の大切さ・地域づくり・社会参画	⑧～⑭
3 防災や安全について【そなえる】 震災津波の経験を踏まえた自然災害の理解・防災や安全	⑮～⑳

「いわての復興教育」プログラム 改訂版08

3つの教育的価値	具体の21項目
1 生命や心について【いきる】 震災津波の経験を踏まえた生命の大切さ・心のあり方・心身の健康	①【かけがえない生命】 全ての生命は、かけがえないものであることを実感し、大切にする。 ②【自然との共存】 自然の恵みや美しさに感動する心と畏敬の念をもち、自然と共に生きることについて考える。 ③【価値ある自分】 どのような状況においても、自分の存在を認め、必要とされる存在であることを認識する。 ④【夢や希望の大切さ】 夢や希望をもつことは、生きる価値を見出すことであり、つらく厳しい状況を乗り越えられることにつながることを実感する。 ⑤【やり抜く強さ】 救援活動などに従事した人々の働きと苦勞を通して、どんな状況においてもやり抜く強さについて考える。 ⑥【心の健康】 つらいことや悲しいこと、環境からくるストレスなどを感じた時の対処方法を学び、自分自身で心の健康を維持する。 ⑦【体の健康】 周囲の環境を理解し、状況に合わせながら安全に気をつけて遊んだり、運動したりする。

3つの教育的価値	具体の21項目
 2 「かかわる」	⑧【家族のきずな】 安心して生きていくための生活基盤として、家族の絆や家族の一員としての喜びを実感する。 ⑨【仲間や地域の人々とのつながり】 幼児や高齢の人々・障がいのある人々等と一緒に生活している地域社会において、互いに支え合う仲間の大切さや地域の方々のありがたさを実感する。 ⑩【県内外や海外の人々とのつながり】 苦しみや悲しみに包まれている人々を支援している人に感謝し、共に協力することの大切さを実感する。 ⑪【ボランティア】 他の人や地域社会に役立つことを自分から進んで実践し、他人の喜びを自分の喜びとして共感する。 ⑫【自分と地域社会】 自然災害が、暮らしの変化や地域経済に与える影響について理解し、自分と地域社会との関係について考える。 ⑬【地域づくり】 郷土の美しい自然、伝統行事・郷土芸能、温かい人々のつながりのある社会、安全なまちを願い、地域づくりにかかわる。 ⑭【復旧・復興へのあゆみ】 震災津波で被害を受けた交通網や産業、住宅やまちの復旧・復興の状況を調べ、安全で生き生きしたまちづくりにかかわる。

3つの教育的価値	具体の21項目
 3 「そなえる」	⑮【東日本大震災津波の様子と被害の状況】 平成23年3月11日に発生した、東日本大震災津波の様子と被害の状況について理解する。 ⑯【自然災害発生のメカニズム】 自然災害が発生するメカニズムやそれぞれの災害について理解する。 ⑰【自然災害の歴史】 過去に起きた自然災害や自然災害と共存してきた人々の努力や工夫などについて調べ、防災・減災について理解するとともに、次の世代へ語り継いでいく。 ⑱【自然災害のライフラインへの影響】 震災津波の被害による被害をもとに、水、電気、ガス、灯油、ガソリン、道路などの供給・輸送システムやその大切さを理解し、ライフラインが止まったときに対応できるようにする。 ⑲【災害時に必要な情報の収集・活用・伝達】 震災津波の被害による被害をもとに、情報の大切さ、情報の収集、選択・判断、発信の方法などについて理解し、活用できるようにする。 ⑳【学校・家庭・地域での日頃の備え】 避難場所や避難方法、避難経路を把握して、安全に避難する。家具の安全対策、避難の方法や持ち出す場所、非常持ち出し品、放射線についての正しい理解など、学校や家庭でできる防災対策を行う。地域の防災システムを理解し、防災活動に参加する。 ㉑【身を守り、生き抜くための技能】 危機を予測(回避)、災害や事故に直面した際に自他の体を守り、被害を最小限に止め、非常時に生き抜く技能を身に付ける。(応急手当や心肺蘇生法、食中毒防止、衣食住に関すること、放射線対策等)

※ 3つの教育的価値と具体の21項目に対応



小学校・低学年用



小学校・高学年用



中学校用

「いわての復興教育」を全県の学校が取り組む意義

地域にかかわらず、本県全ての子どもたちが、「震災津波の経験を後世へ語り継ぎ、自らのあり方を考え、未来志向の社会をつくること」ができるようにする。

● 東日本大震災津波から得られた教育的価値【いきる】【かかわる】【そなえる】は、人間が生きていく上で持つべき普遍的価値と重なるものであり、その獲得は子どもたちの生涯にわたっての生きる力となる。

● 活動や取組によって、「思考力・判断力・表現力」の育成につながり、どんな場面に遭遇しても対処できる応用可能能力となる。

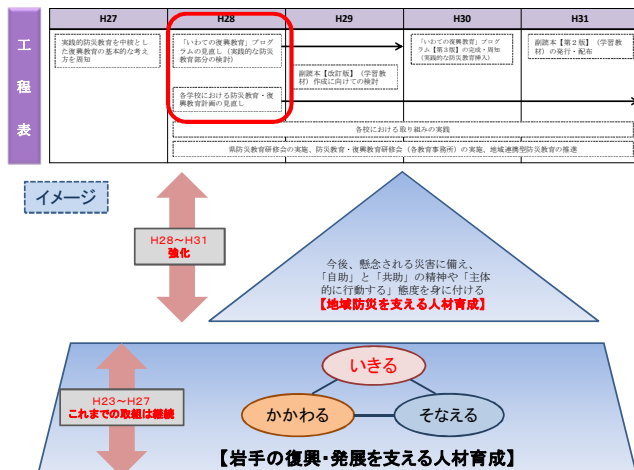
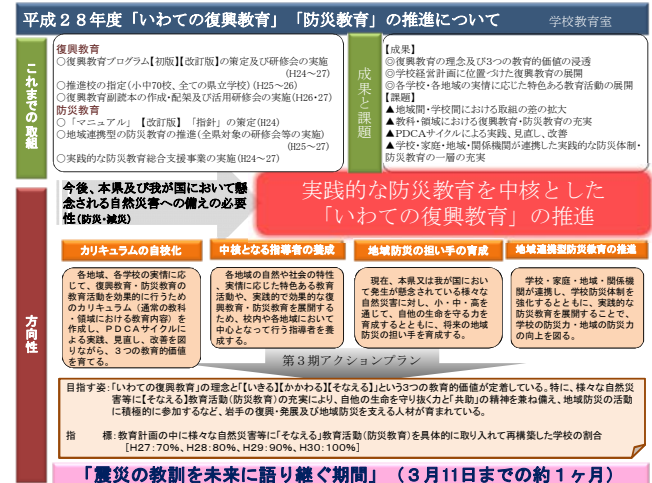
「いわての復興教育」に取り組んできた成果と課題

成果

- ◎復興教育の理念及び3つの教育的価値の浸透
- ◎学校経営計画に位置づけた復興教育の展開
- ◎各学校・各地域の実情に応じた特色ある教育活動の展開
- ◎防災体制・防災教育の一層の充実

課題

- ▲地域間・学校間における取組の差の拡大
- ▲教科・領域における復興教育・防災教育の充実
- ▲PDCAサイクルによる実践、見直し、改善
- ▲学校・家庭・地域・関係機関が連携した実践的な防災体制・防災教育の一層の充実



第3期アクションプラン

目指す姿:「いわての復興教育」の理念と【いきる】【かかわる】【そなえる】という3つの教育的価値が定着している。特に、様々な自然災害等に【そなえる】教育活動(防災教育)の充実により、自他の生命を守り抜く力と「共助」の精神を兼ね備え、地域防災の活動に積極的に参加するなど、岩手の復興・発展及び地域防災を支える人材が育まれている。

指標:教育計画の中に様々な自然災害等に【そなえる】教育活動(防災教育)を具体的に取り入れて再構築した学校の割合 [H27:70%、H28:80%、H29:90%、H30:100%]

印象で語る教育から、「結果」で語る教育へ

カリキュラムの自校化

各地域、各学校の実情に応じて、復興教育・防災教育の教育活動を効果的にを行うためのカリキュラム(通常の教科・領域における教育内容)を作成し、PDCAサイクルによる実践、見直し、改善を図りながら、3つの教育的価値を育てる。

中核となる指導者の養成

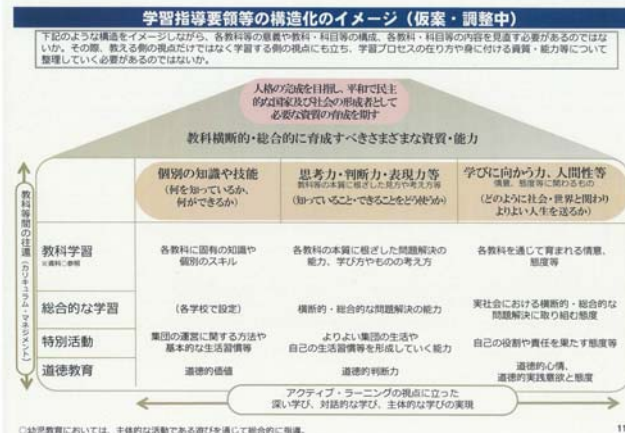
各地域の自然や社会の特性、実情に応じた特色ある教育活動や、実践的で効果的な復興教育・防災教育を展開するため、校内や各地域において中心となって行う指導者を養成する。

復興教育・防災教育の充実に向けて

震災の経験を踏まえ、
子どもたちに必要な力が身に付くための
教育活動、取組になっているか



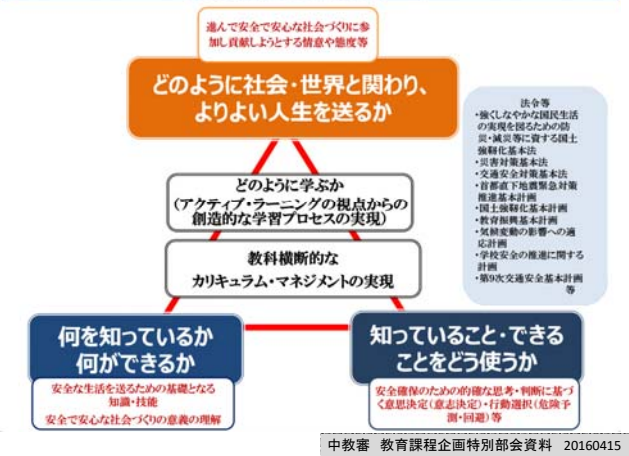
3. 国の動向～中央教育審議会 審議のまとめと概要(論点整理の補足資料より)～



2. 国の動向～中央教育審議会 審議のまとめと概要(論点整理の補足資料より)～



安全に関する資質・能力のイメージ



文科省 身を守る力の全国調査 効果検証へ

文部科学省が子供を対象に、**自分自身を守る力を測る全国調査を実施する検討**を始めた。子供自身が身を守るための教育活動は、15年前の大阪教育大付属池田小(大阪府池田市)乱入殺傷事件を機に広がっているが、その**効果を国が検証**するのは初めて。調査で判明した有効な取り組みを学校間で共有するのが狙いで、来年度以降の実施を目指す。

不審者が侵入した際の避難訓練や身を守る方法を学んだり、独自に地域の安全マップを作ったりする学校も増えている。ただ、これらの取り組みが子供にどのような効果を及ぼしているかは把握できていない。

全国調査は、各地から無作為に選んだ学校の児童にペーパーテストを解いてもらう形式を検討している。**知識を問うだけではなく、校内や通学路の絵を示し、隠れている危険箇所を捜す見つけられるかといった設問**を通して、「**判断力**」や「**行動力**」を判定する。

文科省は調査結果を基に、自治体や学校ごとに効果を比較・検証し、有効な取り組みを学校間で共有させたい考えだ。調査実施に向けた費用を早ければ来年度予算で要求する方針で、具体的な設問内容は専門家の意見を聞いて決める。

文科省は、調査対象外の学校も希望すれば参加できるよう調整し、調査結果は大学や専門家にも提供する。文科省の担当者は「身を守る力と事故発生率の相関関係を調べるなど、**学校の安全を向上**させる研究に役立ててもらいたい」と話している。【大森治幸、安高晋】

文科省が方針 学校管理下事件や災害から子供を守るため

文部科学省は、教員になるために履修する**大学の教職課程で「学校安全への対応」を必修項目とする方針**を決めた。学校管理下の事件や災害から子供を守るために、教員養成の段階から意識や知識の向上を図るのが狙い。教育職員免許法や施行規則の改正を経て、**2019年度にも必修化される見込み**だ。教職課程を各大学が編成する際には、同法や施行規則「各教科の指導法」や「生徒指導理論」などが必修項目に定められているが、学校安全への対応については、一部を除いて規定がなかった。独自に学校安全を学ばせる大学もあるが、文科省が昨年実施した教職課程を持つ大学への調査では、**全体の約54%**(小学校の教職課程)にとどまっている。

……専門家からは「**新任教員でも、赴任当日から子供の安全を守る義務がある**」などと、必修化を求める声が上がっていた。

必修化に際し、**不審者への対応や災害時の避難誘導方法**など、教える具体的な項目は各大学が決め、文科省が内容が妥当かを審査する。ただ、同省の担当者は「各大学の特徴や独自性をなるべく尊重したい」としている。法令の改正後、大学側の課程見直しや審査を経て、**教員を志望するすべての学生が学校安全を学ぶことになる**。【安高晋】

4. 岩手県における教員研修～H28岩手県防災教育研修会～

イメージトレーニング型訓練
与えられた情報から災害対応
をシミュレーションする。



中学校区を中心に
小・中・県立学校、市町村教委・市町村(防災担当)で、連携の課題、解決策を協議する。

県教委・県総合防災室の連携事業

いわての復興教育・防災教育実践研修講座／復興教育研修会

指導者養成研修
[県教委・県・岩大連携]

実践発表&防災教育教材を活用した授業づくりの講義

担当者の研修会(悉皆)
[各教育事務所]

防災に関する授業実践 [宮古市立川井中学校]

各校の副読本活用の実践交流 [宮古教育事務所]

越野先生は災害現場を多く見てきた方のまことに現場の声で説得力があり、目から鱗が落ちたようだった。さっそく、現任校のハザードマップを明らかにし、子どもへの災害への意識付けが必要だと気づかされた。

カリキュラムづくりの講義& 自校のカリキュラムの見直し

かかわり続ける復興支援ボランティア

3年間、同じ地域を訪ね続けることで、自分たちに何が出来るかを考え、ボランティア活動に取り組んでいる。

学 年	訪問先	学習内容・活動内容例
1 年 生	陸前高田市	未来商店街訪問、仮設住宅の清掃・草取り・交流
2 年 生	宮 古 市	旅館女将の話(被災体験、復興の様子)、駅舎清掃
3 年 生	大 槌 町	釜石東中の避難、花壇整備、仮設住宅での清掃活動や合唱披露

西根中学校では、「復興支援ボランティア活動」と、キャリア教育を有機的に関連づけ、復興教育、防災教育を展開している。

人のために何かをすること、優しさを学んだ。友達を大切に、部活や勉強することに感謝して、生活を送りたい。(1年生)

僕たちの合唱を聞いて泣いている方もいて、逆に感動した。もっと自分たちに出来ることがないか探していきたい。(3年生)

大槌での活動(3年生)

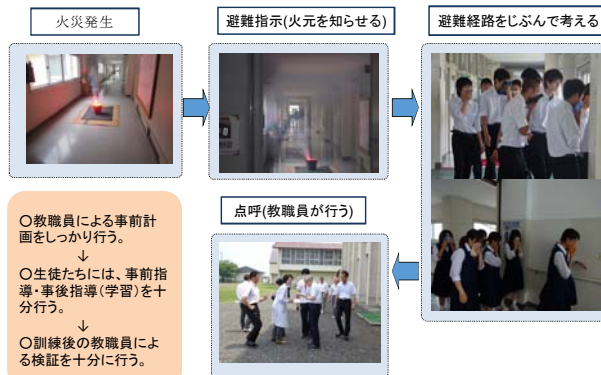
西根中提供資料より作成

文部科学省 実践的防災教育総合支援事業 委託

37

火災訓練

高校生防災スクール モデル校



「6.14」記憶を後世に！



旧祭時大橋の見学・学習、土砂災害、地震発生時の対応について学習

「広報いちのせき」より 39

【そなえる】

【遠野市立上郷小学校】

【八幡平市立西根中学校】

【学習内容】

- 災害時の医療体制
- 緊急災害時の行動
- リアージのロールプレイング
- トランシーバーを用いた連絡、実習

【学習内容】

- 災害医療について
- 衛星電話実習、トランシーバー実習
- リアージ実習、ラップボン実習



72時間というタイムリミットがある現場で、一人でも多くの命を救うために必死に医療にあたる先生方の姿を思い知ることができた。私も先生方のように人のために助けるようになりたい。

岩手医科大学
災害医学講座
眞瀬教授 他

一番心に残ったのはリアージです。…治療する順番を決めることを初めて知りました。順番に並ぶことの大切さを知りました。

H27いわて未来づくり機構～復興教育作業部会～「いわての師匠派遣事業」事例集より

H27防災教育を中心とした実践的安全教育総合支援事業 モデル校



簡単に解決するのではなく、複雑さと向き合わせる



「避難所のルールを守るべきか」
「助けを求めてきた人を救うべきか」

防災道徳の実践



ジレンマメーターに度合いを示しながら、役演技も取り入れながら葛藤させる。

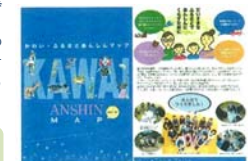
H27県教育研究発表会 宮古市立川井小学校発表資料及び担当者時間大藤先生資料より作成

H27防災教育を中心とした実践的安全教育総合支援事業 モデル校

子どもの安全・安心推進委員会の設置

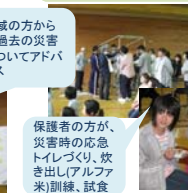
かわい・ふるさと
あんしんマップ作成

学校における安全教育や心の教育・安全管理等の取組の充実を図るため、「防災に関すること」「交通安全に関すること」「防犯を含む生活上の安全に関すること」「心の安全に関すること」それぞれについて連携・協力を展開できる組織を設置。学校・保護者・地域で構成。



親子で地域の危険を予測

保護者の方が災害時の対応訓練



豊かな自然、地域の魅力、地域の歴史、危険箇所が地区ごとに掲載。「わが家のあんしんチェックリスト」付き

「防災教育を中心とした実践的安全教育総合支援事業成果報告書」(宮古市教育委員会より抜粋)

H27防災教育を中心とした実践的安全教育総合支援事業 モデル校

事前学習

DIG ～地域のハザードを知る～

学校防災アドバイザー(防災の専門家)派遣
○岩手大地域防災研究センター 越野教授 他

- 【副読本を活用して】
- 地域の防災訓練に参加しよう(地域のハザードを知ろう)
 - すべてがとまったら、どうする?(ライフライン)
 - そのとき一避難所になった高校



実際に現場を視察してみると、地図では予想できなかった危険なところや予想もありました。フィールドワークでは全日の雨で土砂崩れをしていて、改めると災害が怖いと思いました。

「防災教育を中心とした実践的安全教育総合支援事業成果報告書」(一関市教育委員会より抜粋)

H27防災教育を中心とした実践的安全教育総合支援事業 モデル校

家庭・地域と連携した避難訓練・防災学習

被災地見学【田野畑】



- 副読本を活用し、緊急地震速報の仕組みを学習して、避難訓練を実施。
- シュート訓練の実施。
- OPTA合同による緊急地震速報を活用した避難訓練を実施。
- 町の防災アドバイザーの講演を実施。



○体験可能日を活用して、学校で災害伝言ダイヤルを録音し、家庭で再生する体験を実施。

- 副読本やDVDを活用しながら、地震発生時のメカニズム、津波の実際、被災地についての事前学習を実施。
- 被災地では、NPOガイドから被害者や学び、被災地の人々の思いについて学習した。

学習のまとめ



～防災安全マップ・防災カルタ～

- 地域の方々と連携し、学区内の危険箇所を現地調査し、マップにまとめた。
- これまでの学習を生かして、防災や安全に関わるカルタを作成。

「防災教育を中心とした実践的安全教育総合支援事業成果報告書」(洋野町教育委員会より抜粋)

新たな訓練項目(H26より)

「学校・家庭・地域が連携した防災学習及び防災訓練」

- 期 日 平成27年7月12日(日)
- 想 定 大雨洪水と地震発生時の複合災害



保護者と避難場所へ親子で防災学習
【金ヶ崎町立三ヶ尻小学校】



シェイクアウト訓練/保護者引き渡し
【奥州市立岩谷堂小学校】

自分たちができること～地域防災の担い手の育成～



上:防災講話／下:シェイクアウト訓練

上:心配蘇生法・避難所衛生／下:救急搬送

(1)災害発生時には、進んで他の人々や集団、地域の安全に役立つことができるようにする。
(2)自らの役割を自覚し、その役割を主体的に果たすことによって、人と協力し力を合わせる
ことができることの大切さについて体得させる。

【オリエンテーション】(全校:6月27日)
【避難訓練】(全校:6月30日)

【キャップハンディ体験】(2年生:9月3日)


【災害時のトイレ作り】
(1年生:9月2日)

副読本
P20・21
P66・67

【応急処置体験】(全学年:6～7月)


副読本
P68

【炊き出し訓練】(3年生:9月5日)



【総合防災訓練の事前学習】(10月30・31日)

《防災巻にメモしよう》
○20XX年11月5日 午前8時45分 地震発生
○道が寸断されて、ライフラインが止まった
○体育館を避難所に
○天候 曇り
○救助がくるまで3日間


【総合防災訓練】

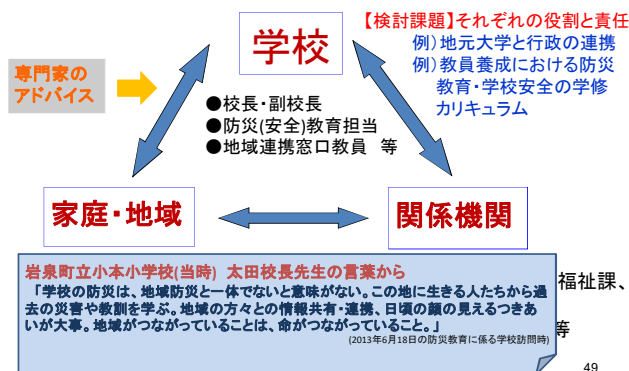
(11月5日)

生徒が、避難所運営本部を設置し、避難所設置、救急対応、炊き出し、物品管理等を行う。

ワークショップ①
防災巻に「こんなときなにをする？」を記入
ワークショップ②
体育館見取り図に、避難所を設置するときどこに何を置くか
副読本P34
「そのとき避難所になった高校で」活用

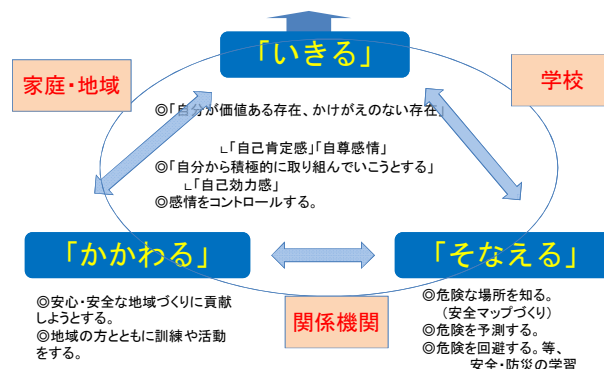

6 おわりに

学校・地域(行政)・家庭の連携・協働体制



49

故郷を愛し、その復興・発展を支える「人づくり」 ～安全な社会を築いていく～



【参考】釜石東中学校の生徒の聞き取り調査から(当時中2)

【1】

フィールドワーク(両石地区、箱崎地区、片岸地区)で、過去に実際に津波被害(明治・昭和三陸大津波、チリ津波)にあったところに行き、そこで、体験談を聞いたり、実際に津波がきたところを自分で見たり、津波記念碑を見たりして実感し、学習したことをまとめ、発表した。そうした学習で、震災前に津波を経験したことはなかったが、経験則になったと思う。

【2】

フィールドワークで、地域の人から「津波でんでんこ」という言葉を教わった。津波警報が出ているとき、いくら家族が心配でも迎えに行ってしまうといけなかった。私は、大事な家族が心配なのに、家に見に行ってしまうといけなかったことに納得出来なかった。学習の後もずっと引っかかっていて、家族で話し合うことにした。津波の心配の恐れがあるときは、それぞれがそれぞれで逃げ、迎えに行かないことにした。今回の震災で、父親は、会社(釜石港の方)から子どもたちが心配で迎えに行こうと思ったが、娘の言葉を思い出し迎えに行くのを止めて、自分は自分で避難した。

【参考】釜石東中学校の生徒の聞き取り調査から(当時中2)

【3】

箱崎地区から通学していたが、鶴住居地区の友達の家で遊んだとき、もしここで大きな地震がきたら、家具の転倒とか大丈夫だろうか、近くの津波避難場所はどこだろうかということが友達同士でも話題になっていた。中学生でそれくらいの意識を持っていた。

【4】

3月11日、あの大きな地震があったとき、津波が来るといった。それは、学校での学習、特に、津波の高さを校舎を使って体感したり、校舎では高さが足りないときは、ろうかて人が並んで高さを確認した。ろうかて長さを確認したとき、それが上になったら想像して、すごい高さの津波がきたことを実感した。また、津波の速さを、車と競争したりしたことが印象に残っている。そして、津波が来るといったのは、それらの学習のこともあるが、先生がこれだけ大事な学習として教えてくれているということは、本当に津波は来るんだと思ったことが背景にある。

【5】

ございしょの里では、高さでは足りないと思っていた。お母さんから、いざというときは、先生の指示をきちんと聞いて避難するように言われていた。でも、ございしょの里は低いから、危険だと思ったら、先生の指示は聞かず高いところに避難するよう言われていた。

【参考】釜石東中学校の生徒の聞き取り調査から(当時中2)

【6】

やまぎきデイスービスに移動したとき、津波が押し寄せてきたので、さらに高いところへ逃げようとしたとき、小さな子どもがいた。今なら間に合うと思って少し下がって、抱きかかえ、高いところを目指した。坂が急勾配になり、自分の力ではダメだと思い、近くの友達のお父さんにお願いした。このとき、「でんでんこ」かどうかが自分の判断基準になっていた。

【7】

防災ボランティアや安否札配布の取組のように、地域を巻き込む取組が大事だと思う。安否札の配布のとき、地域の人に声をかけ、その後も挨拶をしたり、声をかけられるようになったりして、地域の人とのつながりもできたし、防災意識を高めることもできた。